

女性の世界地図 —女たちの経験・現在地・これから

本書は、地図やグラフ満載のカラフルでポップな本である。しかし、ページを繰ると、普段私たちが接している情報がいかに限られたものであるかに気づかれる。結婚・離婚・暴力・妊娠・出産・教育・仕事・貧困・政治・環境、ソーシャル・メディア、農業、家事・育児、化粧品、スポーツ…。女性もこの世界に生きている以上、あらゆる問題と関係していく当然なのだが、シーガーの「女性の経験を真剣に語るというレンズ」を通して世界を見ると、今まで見えなかつたもの、社会の中で不可視化されていたものが次々と目に飛び込んでくる。国際比較では、日本と比較するに“ふさわしい”先進国のデータが使われることが多いが、女性国議員を増やすためにクオータ制や政党による男女比の調整を実施している国は、中南米にもアフリカにもある。より広い視野でグローバルに女性の経験を共有することが、私たちにヒントをくれる。そうした情報を探しにこの本を開くこともできる。

一方、同じ国の女性でも、人種やエスニシティ、貧富の差などによってライフコースが違ってしまうというのも現実だ。シーガーが言うように、女性の共通性と差異の両方に光を当てるために、データを地図としてビジュアル化することがどれほど有効であるかがよくわかる一冊である。

コロナ禍で、ジェンダー平等は後退の危機にあるといわれている。コロナ禍の影響を地図に表すと何が見えてくるのか。そんなことも考えさせられた。

神奈川大学 法学部 教授 近江 美保さん

さよなら、男社会

男はどういうに「男」になっていくのか。男社会で認められる男になろうとした結果、どのような「傷」を負うことになるのか。本書は、男社会を男性の心の側面から語っていく。

たとえば、男社会の中の男は、「強くあらねばならぬ、勝たねばならぬ」と言われ続ける。ひたすら「強くあろう」とすると、自分の中の「弱さ」を見ないようになる。自分の弱さや感情に耳を傾けることをやめてしまう。自分の感情を拒否する人は、人の感情にも気付きにくい。

このように男社会で生きることに傷ついている男性たちに、著者は、「だいじょうぶ?」と自分自身と対話しようと提案している。

しかし、ここで明らかにされているような男社会の特徴や問題は、すでにフェミニズムや男性学で指摘されている内容で、目新しいものではない。

また、まずは自分に向き合うという解決策も、果たしてこれまで自分自身の感情すら見ないようにしてきた男性が、言われただけですぐできるのか疑問だ。

それでも、著者が自らの体験を振り返ることから始めていく、ていねいな語り口にいざなわれて読み進むうちに、気が付いた。著者は、まず自らが、自分自身と向き合うとはどういうことなのかを、やってみせてくれているのではないか。

とかく自慢になりがちな「自分史」とは違う。私たちひとりひとりが、幼少期からの記憶をたどりながら、自分と対話してみれば、男社会が変わるかもしれない。

ぜひ、男性に読んでもらいたい。

関東学院大学 経営学部 教授 中村 桃子さん



- ジョニー・シーガー 著
- 中澤 高志、大城 直樹、荒又 美陽、中川 秀一、三浦 尚子 訳
- 明石書店
- 2020年初版
- 3,200円(税別)

不 可視化

女性が無償で担ってきた家事・育児や、コロナ禍で注目されるようになったエッセンシャルワークのように、社会に不可欠なのに、社会の構造や制度あるいは人々の思い込みによって見えない=不可視化されているものがある。女性に関する問題には、不可視化されているものが多く、それらはあたかも存在しないかのように扱われて、救済や解決の対象にもなりにくい。#MeTooなども、不可視化されてきたものを可視化しようとする動きである。



- 尹 雄大 著
- 垂紀書房
- 2020年初版
- 1,400円(税別)

男 社会

一般に、男性を優位とみなし、女性を蔑視する考え方に対する特徴付けられる社会を指す。「男社会」は男尊女卑の思想を反映したさまざまな制度や意識からなる。たとえば、就業機会や労働環境・給与・昇進にかかる女性への差別的な制度、家事・育児・介護を女性に担わせる性別役割分担意識、政治や経済・学術分野への女性の進出や活躍を阻害する仕組み、レイプやDVをはじめとする男性から女性への性暴力などが含まれる。

外国にルーツを持つ女性たち 彼女たちの「こころの声」を聴こう！

日本の在留外国人数が2019年時点でおよそ283万人。1985年から行政主導で進められた結婚相手が見つからない日本人男性とフィリピン女性との結婚など、国際結婚により日本で暮らす女性がいる。

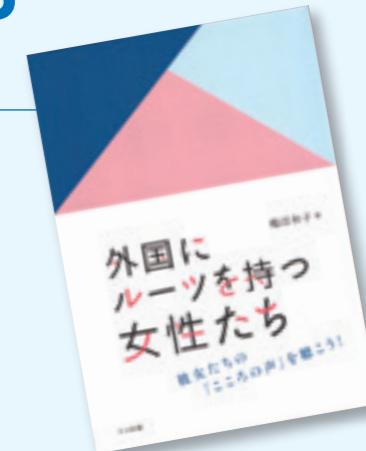
彼女たちには、日本語が上手にならなくても暮らしていく、生活していくれば自然に覚えられるという本人の思い込みや、周りの声がある。しかし、日本語学習が彼女たちの生きの力になっている事例がいくつもある。

50歳で韓国から秋田県藤里町に移住したサッチャンは「おめ、食つか。うめよ」と聞き覚えた日本語を、招かれた親戚の結婚式の披露宴で使い誤解を生んでしまった。良かれと思い掃除をしたところ、大事な書類をゴミと思い処分してしまい、日本語力の足りなさを痛感。日本語を学ぶことを決意し、地域でキムチ教室の講師となり、農協婦人部でも頼りにされるようになった。

地域に溶け込んだ事例に共通しているのが彼女らの悩みを理解する人の存在である。夫や職場の上司、日本語教室の先生であり、日本語を習得することで地域社会で自分の居場所が生まれ、生きる喜びや勇気が生まれている。

多くの日本人にとって外国人の生活や悩みについて知る機会は少ない。これは外国人との関係に限ったことではなく、日本人同士でも言えることであり誰もが孤立しない社会をつくることは日本の課題である。本書で紹介されている事例を外国人の課題と日本人の課題でもあることを認識したい。

公益財団法人 大阪YMCA 代表理事 小川 健一郎さん



- 島田 和子 著
- ココ出版
- 2020年初版
- 1,800円(税別)

国 際結婚

日本における国際結婚は、農村にアジアからの「外国人花嫁」を行政が斡旋した1980年代に増加し、2006年には総婚姻件数の6.1%(44,701件)とピークに達した。夫日本人、妻外国人の割合が全体の約70%、妻は中国人、韓国人・朝鮮人、フィリピン人の順でアジア系が多い。2000年代、人身取引対策が強化されたことに伴い、妻が外国人の婚姻が大きく減少した。一方、妻が日本人、夫が外国人の婚姻件数は急激な変化はない。

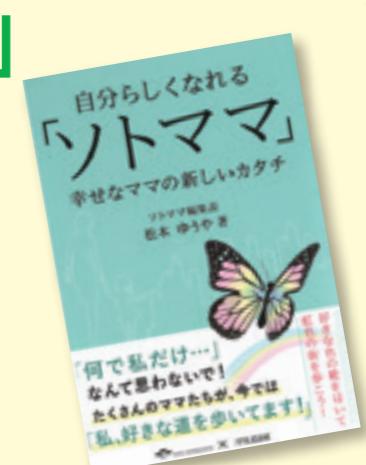
自分らしくなれる「ソトママ」 幸せなママの新しいカタチ

(株)サイズラーニング 専任コンサルタント・育休後アドバイザー 黒木 恵香さん

「一人でがんばりすぎなくても、大丈夫だよ」。本書を読んで、いちばん強く感じたのは、このメッセージだった。本書は、子どもや家族のためにと、家事や育児、家族のケアに追われ、一生懸命がんばる日々に少し疲れてしまった人へ、ぜひお薦めしたい一冊だ。

「母親」という役割に課せられるものは、今もなお多いようだ。共働き世帯数が片働き世帯数の倍以上に増え、人生の中で複数の役割を担う人が多数派になっても、こと家事や育児に関しては、すべて母親の仕事、という認識がまだ根強い。「家事を完璧にやらなければ」「子育ては誰にも頼れない」と苦しむ母親たちの声を、仕事柄聞く機会も多い。

ところが本書では、ママの人生も自分の人生も、どちらも大切にして楽しんでいる母親たち、通称「ソトママ」が多数登場する。そんな母親がいるのか!?と驚くかもしれないが、実際に著者は100人以上のソトママたちと出会い、本書を執筆するに至っている。著者の集めたソトママたちの経験談を読むと、彼女たちも最初は「すべて母親がやらなければ…!」と家



- 松本 ゆうや 著
- 1万年堂出版
- 2020年初版
- 1,400円(税別)

事や育児を抱え込み、悩み、我慢していた。そこから抜け出せた最大のきっかけが「『思い込み』から解放されて、楽になった」こと。「母親なら○○すべき」って実は思い込みだったんだ…! そう気づいた瞬間から、ソトママたちには実に多くの変化が訪れるのだが、詳しいストーリーはぜひ本書で確認を。

もし今がつらいと思っていたら、本書を手に取ってほしい。「母親だからって一人で抱え込みすぎなくてよかったんだ」というソトママたちの気づきと変化の物語は、きっとあなたの重すぎる肩の荷を軽くしてくれる。そう、母親だって、もっと自分の人生を楽しんでいいはずなんだ。